

雜報

第三十一回文科學術談話會記事

□年の暮からつゞいた晴天も、この頃になると曇り勝だ。稀には寒さの中から搖ぎ出た春のやうな日もないではないが、多くは暖かならば雨、寒ければ雪、今學年の最後の文科會の今日も灰色の空が低う垂れた寒い日であつた、四つのストーブはばちと氣持のいゝ音を立て、燃えてはゐるが、この大講堂の隅の隅の空氣までを温める程の熱はない。寒さは靴の爪尖から泌み込むやうであつた。こんな寒い日にも校長、下村先生、垣内先生の御臨席下さつた事は、會員の云ひ知れぬ歡喜であつた。

□卓上の硝子の水さしを通じて植木鉢の細い葉のさゆらぎを見てゐた眼を外らして、演壇の斜後に貼られたプログラムを見ると次のやうに書いてあつた。

教育の根本問題	文一	中村先生
漢文朗讀	文三	吉田喜代
學級教授の能率	文二	伊藤ふき
國文朗讀	文四	大橋しま
ベートオベン	文四	藤浦初音

□「教育の根本問題」と繰り返して讀んで見て「六ヶ敷しさうだ」と思つた。而し部長の御紹介について演壇にお立ちになつた先生は、この六ヶ敷の問題を種々の方面から非常にやさしく面白く話して下さつた。二百人の會員は一語も聞き漏すまいと夢中になつて先生を見つめた、一時間半の御話は終つた、先生は壇を御

降りになつた、會場は急に寒くなつた。ストーブの火は消えかゝつてゐる、石炭を足す事さへ忘れてゐたのである、先生の御話の詳細は談叢に譲つて置く。

□講演の事は講演欄に譲つて此處には朗讀に就いて一筆加へて置き度いと思ふ。漢文、國語の朗讀といふ事それが已に自分を喜ばせた。殊に今日の朗讀は共に頗る善い出來榮であつた。發音もハッキリして奇麗であつたし、讀み方も力があつて巧であつた。材料もよかつた。強て云へば二つ共に終が少しだれ氣味であつたのが惜しかつた。

□會が終つたのは五時半であつた曇つた空はどうも雨になり間もなく雪になつた。講堂前のうす暗い電燈のかげを三つ五つと散らばつて見える傘は外舎の人が今歸つて行くのである。自分は講堂の入口に立つてそれを見送りながら「自分等が委員としての文科會も、今去つてしまつたのだ」と思つた時、何等爲す事のなかつた過去の一年が大きな黒い塊となつて胸の隅にあるのに息のつまるやうに思つた。會員の去つた後の會場はガラリとして電燈のみがうすら寒く輝いてゐる。(四、一、二、三、T.N.)

第十回會計決算報告 (自大正三年十一月廿一日 至全四年三月十日)

一、收入金額	一四五、〇四五	第二學期繰越高	五三、九三五
内		贊助員八四名會費	六九、三三一
譯		會員一四三名會誌實費	二一、四五
		預金	三五
		利子	

一、支出金額

八九、二四五

内 譯

六三、二〇
一六、四五
五、〇〇
四、五九五

會誌第十號四五〇部印刷代
往復はがき四七〇枚印刷代
會誌發送料
雜費

一、差引殘高

五五、八〇

右之通り相違無之候也

大正四年三月十日

文科會々計係

會費領收

明治四十四、大正元、二、三年度分

法貴すゑ

大正元、二、三年度分

橋川篤子 藤田 靜 小穴みん 森岡たけ 蛭子つま

大正二、三年度分

橋本きを壽 澤 ため 芦川春子 幸田龍子

大正三、四年度分

中西ちよ 由井 長

大正元年度分

山崎かつ子

大正二年度分

河口せい

大正三年度分

千葉安良

東條はる

塘みどり

半田たま

水民芳

大正四年度分

島津みち

小倉千年

中村イト

齋藤加津

島澤しげ

松橋やす

杉山もこ

石川 都

大岩のぶ

菊田 豊

伊地知あぐり

鈴木しやう

阿部ツル

稲垣のぶ

小野あつ

中山タエ

水谷年恵

豊島こも

小泉イク

森かよ

直江かめ

井上いつ

青山はな

飯島 貞

岡田ひさ

伊藤うめ

大西シヅ

武藤キヨシ

宮崎かつ枝

金森かう

越前ツタ

島村ちか

原しげの

清水俊尾

加賀山 貞

栗崎さき

石川シゲ

加藤あや

安永ミチ

關みさを

竹本せい

白神美子

堺さき

西脇りか

川口 琴

極部鳥羽

菅野けい

林たけ

金谷たけ

國府富美

飯沼 檀

國枝 琴

梶原千代

筒井たか

梅野はつ

平野さき

山下サイ

林はる

富津美穂

多田しめよ

江藤 馨

市瀬ちひろ

窪田ケイ

一、入會者 (一一一名)

會員 動靜